

民國文存

35

國外考察記兩種

傅芸子 程硯秋 著

知識產權出版社

民國文存

35

國外考察記兩種

傅芸子 程硯秋 著

知識產權出版社

本書為《正倉院考古記》及《程硯秋赴歐考察戲曲音樂報告書》的合編。前者為傅芸子考察日本正倉院中所收藏的中國文物，尤其是唐代流傳下來的種種器物，具有極重要的文化意義。後者為程硯秋考察歐洲各國如俄國、法國、德國及奧地利等的音樂戲劇，從中可以見到民國時代中外戲曲音樂之間的差別。

本書適合對文物及音樂戲劇感興趣的研究者和大眾閱讀。

責任編輯：羅 慧 責任校對：韓秀天 動態排版：賀 天
特約編輯：韓秀麗 責任出版：盧運霞

圖書在版編目（CIP）數據

國外考察記兩種/傅芸子、程硯秋著—北京：知識產權出版社，2013.1

（民國文存）

ISBN 978-7-5130-1516-5

I. ①國… II. ①傅…②程… III. ①歷史文物—研究—日本

②歌劇—戲曲音樂—研究—歐洲 IV. ①K 883.130.4②J 617.2

中國版本圖書館 CIP 數據核字（2012）第 214565 號

國外考察記兩種

Guowai Kaochaji Liangzhong

傅芸子 程硯秋 著

出版發行：知識產權出版社

社 址：北京市海澱區馬甸南村 1 號

網 址：<http://www.ipph.cn>

發行電話：010-82000860 轉 8101/8102

責編電話：010-82000860 轉 8345

印 刷：北京中獻拓方科技發展有限公司

開 本：720 mm×960mm 1/16

版 次：2013 年 3 月第一版

字 數：148 千字

郵 編：100088

郵 箱：bjb@cnipr.com

傳 真：010-82005070/82000893

責編郵箱：luohui@cnipr.com

經 銷：新華書店及相關銷售網站

印 張：12

印 次：2013 年 3 月第一次印刷

定 價：48.00 元

ISBN 978-7-5130-1516-5/K · 140 (4376)

出版權專有 侵權必究

如有印裝質量問題，本社負責調換。

民國文存

(第一輯)

編輯委員會

文學組

組長：劉躍進

成員：尚學鋒 李真瑜 蔣 方 劉 勇 譚桂林 李小龍
葉 曄 吳冠文 鄧如冰 金立江 張新贊

歷史組

組長：王子今

成員：秦永洲 張 弘 李雲泉 李揚帆 姜守誠 吳 密
姜 鵬

哲學組

組長：周文彰

成員：胡 軍 胡偉希 彭高翔 干春松 楊寶玉

出版前言

民國時期，社會動亂不息，內憂外患交加，但中國的學術界卻大放異彩，文人學者輩出，名著佳作迭現。在炮火連天的歲月，深受中國傳統文化浸潤的知識份子，承當著西方文化的衝擊，內心洋溢著對古今中外文化的熱愛，他們窮其一生，潛心研究，著書立說。歲月的流逝、現實的苦樂、深刻的思考、智慧的光芒均流淌於他們的字裡行間，也呈現於那些細緻翔實的圖表中。在書籍紛呈的今天，再次翻開他們的作品，我們仍能清晰地體悟到當年那些知識分子發自內心的真誠，蘊藏著對國家的憂慮，對知識的熱愛，對真理的追求，對人生幸福的嚮往。這些著作，可謂是中華歷史文化長河中的珍寶。

民國圖書，有不少在新中國成立前就經過了多次再版，備受時人稱道。許多觀點在近一百年後的今天，仍可說是真知灼見。眾作者在經、史、子、集諸方面的建樹成為中國學術研究的重要里程碑。蔡元培、章太炎、陳柱、呂思勉、謝無量、錢基博等人的學術研究今天仍為學者們津津樂道；魯迅、周作人、沈從文、丁玲、梁遇春、李健吾等人的文學創作以及傅抱石、豐子愷、徐悲鴻、陳從周等人的藝術創想，無一不是首屈一指的大家名作。然而這些凝結著汗水與心血的作品，有的已經

罹於戰火，有的僅存數本，成為圖書館裡備受愛護的珍本，或成為古玩市場裡待價而沽的商品，讀者很少有隨手翻閱的機會。

鑑此，為整理保存中華民族文化瑰寶，本社從民國書海裡，精心挑出了一批集學術性與可讀性於一體的作品予以整理出版，以饗讀者。這些書，包括政治、經濟、法律、教育、文學、史學、哲學、藝術、科普、傳記十類，綜之為民國文存。每一類，首選大家名作，尤其是對一些自新中國成立以後沒有再版的名家著作投入了大量的精力，進行了整理。在版式方面有所權衡，基本採用化豎為橫、保持繁體的形式，標點符號則用現行的規範予以替換，一者考慮了民國繁體文字可以呈現當時的語言文字風貌，二者顧及到今人從左至右的閱讀習慣，以方便讀者翻閱，使這些書能真正走入大眾。然而，由於所選書籍品種較多，涉及的學科頗為廣泛，限於編者的力量，不免有所脫誤遺漏及不妥當之處，望讀者予以指正。

目 錄

正倉院考古記	1
序一	3
序二	5
序三	7
序四	10
自序	12
凡例	13
一 正倉院之由來	16
二 正倉院之價值	19
三 正倉院之觀覽	21
四 三倉之概觀	23
(1) 北倉下	23
(2) 北倉上	40
(3) 中倉下	61
(4) 中倉上	68
(5) 南倉下	69
(6) 南倉上	77
五 結語	90

圖版	91
圖版一 金銀平文琴	92
圖版二 螺鈿紫檀五絃琵琶	93
圖版三 螺鈿紫檀阮咸	94
圖版四 花咋烏銀平脫合子	95
圖版五 吳竹笙吳竹竽	96
圖版六 螺鈿紫檀琵琶	97
圖版七之一 紅牙撥鏤撥	98
圖版七之二 刻雕尺八	99
圖版八 烏毛立女屏風（一）	100
圖版九 烏毛立女屏風（二）	101
圖版一〇之一 鹿草木夾纈屏風殘闕	102
圖版一〇之二 橡地象木蒨纈屏風殘闕	103
圖版一一 木畫紫檀棊局	104
圖版一二 木畫紫檀雙六局	104
圖版一三之一 紅牙撥鏤尺二枚之一	105
圖版一三之二 綠牙撥鏤尺二枚之一	105
圖版一四 紫檀木畫挾軾	106
圖版一五 銀薰爐	107
圖版一六 人勝殘闕雜張	108
圖版一七 繡線鞋四兩之四	109
圖版一八 漆胡瓶	110
圖版一九 螺鈿花鳥背圓鏡	111
圖版二〇 金銀平脫花鳥背八角鏡	112
圖版二一 金銀鈿裝唐大刀	113

圖版二二 碧地二窠長方氈二床之一	114
圖版二三 花卉人物長方氈二床之一	115
圖版二四之一 筆三枝	116
圖版二四之二 唐開元貞家墨	116
圖版二五 刀子二口	117
圖版二六 漆繪彈弓	118
圖版二七之一 紫檀金鈿柄香爐	119
圖版二七之二 犀角撥鏤莊如意	119
圖版二八 柿柄塵尾	120
索 引	121
程硯秋赴歐考察戲曲音樂報告書	127
引子	128
上章	131
下章	159
結語	175
編後記	177

正倉院考古記

傳芸子 著

序一

《正倉院考古記》，民國傅芸子先生所著也。自我國通使，隋唐文物波及列聖，取其資治道、厚民生者以恢弘鴻業，損益之故、陶鑄之迹，載於政書，存於古器，譬諸希臘文化受影響於埃及，羅馬藝術溯淵源於希臘，而均不失其爲固有文化。天平文化^❶之盛，亦如此而已。

正倉院尊藏衣冠服飾、武備農工、日常器用、玩好音樂、文房供佛之具，其中有自唐傳來者，有存於我而佚於彼者，有係我工師作者，有不能辨內外者，珍物羅列，煥焉炫目，爲天下罕倫之一大寶庫。先生聘爲京都大學及東方研究所講師多年，以博雅之才耽考古之思，屢遊奈良觀瞻尊藏。稽之其國史籍，又徵之邦人著述，刻苦研摩，遂能成此書。若謂烏毛立女屏風疑歸化唐工所作，而着想則本於其國當時流行之毛裙，後又以施於屏風文字。人勝爲用有二，一以金箔鏤成，人日貼於屏風；二剪綵爲之，戴於頭鬢。此物乃用貼於屏風，與唐李商隱《人日詩》合。木畫紫檀碁局，凡十九道，明胡應麟未見實物，僅据唐詩詠碁有“十九條平路”句，疑唐局爲十九道。柳子厚記石局十八道可弈，非通制，今徵於此，知胡說不誤。雙六局有南北之別，此中所陳，尚有雙六頭，雜玉雙六子，其狀如碁子，知日本雙六乃南種非北種，與洪邁《譜雙·序》亘遼以東，或謂與南不殊語，足互相證明。其辨一事，稽

❶ 天平文化指日本奈良時代以京城平城、長岡爲中心的文化，取自日本聖武天皇在位（724~748年）的年號，但其意義則指整個奈良時代的文化。——編者註

一物，必有所本，不爲架空之說。斯書一出，知世之考唐代文化者得以爲指針。稽天平文化者，又得以明其來歷與冶鑄變化之美，則其益於學界，不特我兩國矣。直喜學問淺薄，於藝術一道毫無知識，但與先生交久，序文之徵，不敢辭。爰綴次所見，以答雅意。

昭和辛巳二月狩野直喜

序二

惟みるに正倉院は我が皇室の寶庫であり、聖武天皇崩御の後光明皇后の天平勝寶八歳を以て先帝追福の奉爲め“國家珍寶種々翫好及御帶牙笏弓箭刀劍兼書法樂器等入東大寺供養盧舍那佛及諸佛菩薩一切賢聖”せられたに拘まる。爾來星霜を閱すること茲に一千一百有餘年。其間幾度かの兵禍もその厄を免れ、雷火もその災を及ぼすことなく綿々として今に至る。洵に是れ神佛加護の致す所歟。若し夫れ時代の古きを以て之を論ずれば、正倉院所藏の諸物よりも更に數世紀以前に溯るもの、世亦必ずしも稀なりとせぬ、而も何れも二れ出土の品であり、風土の侵蝕し、水火の毀損する所たるを免れず、院所藏の新たに成れるが如きものと同日に談すべきではない。況んや其品種頗る多岐に涉り、圖書屏風鑑鏡某局の屬は言ふを俟たず、染織藥物より文房の珍玩、農工の器具に至るまで殆んど備はらざるならに於てをや。固より現所藏の此等諸品の中には、皇家の御物のみならず、或は當時貴顯大官の寄進に係るもの、或は東大寺舊藏のものも尠しとせぬ。又其年代の確として徴すべからざるものもないではないが、其作風手法等に賴つて之を觀れば何れも奈良朝若くはそれ以前のものたるは秋毫疑を容れない所である。更に其産地に就て之を言ふも、或は唐土將來のものあり、或は我邦製作のものもあり、而も天平前後に於ける我邦は隋唐の感化を受くること最も濃厚なる時代であり、少くとも上流社會の嗜味好尚は殆んど彼と異ならず、技藝の進歩亦

能く彼と雁行し、題銘款識の明記せらる、ものにあらざれば何人と雖も能く之を鑒別し得ないのである。是故に此等諸品は以て我邦古代の藝術の精華を顯彰すべく、亦以て隋唐人の生活情狀を髣髴たらしむるに足るものがある。我が正倉院の學界の至寶たる所以のもの亦實に此に在つて存する。

傳君芸子は向きに我が東方文化研究所の招聘に應じ、來つて京洛に淹留せられ、幾度か寒暑を換ふ。此間特に正倉院の拜觀を許され、親しく實物に就いて之を點檢し、觀るに隨つて之を注記し、旁ら博く古今の記録を搜り、其性質用途並びに其傳來の有無を詳述し、以て此書を成し、加ふるに數十葉の珂羅版を挿入し、人をして宛も目觀の想あらしぬた。乃ら此一篇の《考古記》は啻に彬々たる東方文化の迹を闡明するのみならず、又善く我が正倉院の價值を宇内に宣揚するものとも稱すべきである。本篇の稿成るや、君序を余に需ぬらる。余君の勞を多とし、且つ其學海に稗補する所の大なるものめるを信じ、喜んで一言を卷首に題し序に代ふと云爾。

昭和十六年一月
於東方文化研究所
松本文三郎

序三

我邦奈良の都の大御代は、文化の最も發達せし時代にして、政治上に在りては大化改新以來、文物制度悉く完備し、文化上に於ては、かの飛鳥時代を承け、美術技藝亦其の精熟の域に達し、其の絢爛たる光景は正に萬樹の櫻花繚亂として咲き榮えたるが如く、世に之を奈良朝文化又は天平文化と稱す。

當時の唐土は恰も李唐時代にして、久しく分裂せる天下を統一せし隋の後を承けて更に版圖を擴大し、遠く印度西域との交通も繁く、其等の文化を攝取して之を融會し、以て其の絶代の盛運を開けり、而して我邦との往來も亦頻繁を極ぬたるを以て、自然彼の文物の我に流入するもの多きを加へ、華麗なる奈良朝文化の出現に多大の寄與をなししと、固より言を俟たざるなり。

正倉院寶庫は奈良朝天平時代を下らざる建築にして、現に奈良市の西北部東大寺に近く、依然當年の形態を保有せる一大木造倉庫なり。庫中尚ほ藏する所の御物、亦寶庫建設と時代を同じろするものにして、其の様式多種且つ無數に上り、當代美術工藝の精髓を網羅して餘す所なく、而も其の大部分は恰も輓近の製作に係る如く精巧鮮美、燦爛として目を眩せしむ。惟ふにかく多數の寶物を千年の久しきに互り完全に一堂に保存し、以て今日に及べるもの、世界恐らく他に其の類例を見ざるべし。

本寶庫はもと東大寺の管する所なりしも、庫中尚ほ藏する御物は皇室に特別由緒あるものなるを以て、其の始より制を立て永

く勅封を以て閉鎖せらるることとなり、點檢曝暎其の他必要ある場合には勅許を仰ぎ、勅使の差遣ありて始めて開扉を行ふものと定められなり、此の制度は世に治亂ありと雖も累世變るることなく、明治に至り世傳御料に編入せられ、帝室博物館總長をして其の事務を掌理せしめらるるに至りしも、猶ほ勅封の制を襲ひ以て今日に及べり。

按ずるに正倉院は其の創建以來多くの年月を經過せしを以て、其の間諸種の危険に瀕せしこと固より尠からず。而も一木造の建築を以て千二百餘年の久しきに亙り、其の尚ほ藏せる無量の貴重品と共に克く今日に存續せる所以のもの、實に勅封の賜たらずんばあらず。蓋し我國民は古來皇室を尊崇し、勅令を遵奉し、勅封を嚴守して、敢て之を侵犯する者なし。天災に際し落雷の厄に罹りたることあれども、僅かに扉を燒きしのみにて幸に大事に至らず。又戰亂に際し兵燹の街に咫尺し四隣燒土と化せしことありしも、祝融亦本寶庫を呵護す。斯の如きは之を天佑に歸せざるべからずと雖も、而も戰國の際牆垣廢頽して浮浪の徒自由に園内に入出し、甚しきは猥りに床下に起臥せしことさへ打續きたるに、敢て寶庫の障壁を毀損する者あらざりしは、又偏へに國民性の然らしむる所にして、其の傳世の永き寔に宜なりと言ふべく、我が國人が特に正倉院を崇重し齊しく國民的矜持を有すめ所以のもの、固より其の尚ほ藏する御物が皇室に特別由緒ある貴重品たると共に、其の傳世の久しき亦萬邦無比の理由を有するに賴らずんばあらず。

正倉院は毎年秋期に一回勅を奉じて開扉し、十數日に涉り御物の曝日を行ふを例とし、此の時期に於て、所定の資格を有する